

## 第6学年2組 道徳学習指導案

1 **主題名** 生命の尊さ 集団生活の充実

2 **資料名** 「楽園のしっぽ」(村山由佳 著者 文藝春秋 から一部抜粋)

### 5 本時の学習指導

(1) ねらい

生命が多く、生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。先生や人々を敬愛し、みんなで協力し合ってよりよい学級や学校をつくるとともに、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること。

(2) 展開

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	教師の支援	時間
○資料を読む			3
○状況の把握	<p>○とある家の前に落ちているツバメのヒナを見つけたとき、私はどう思ったのかな</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒナがかわいそうで助けたいと思った。</li> <li>・スズメだって育てたことあるから、ツバメだって育てられる。</li> <li>・放っておいたら死んじゃうかもしれない。</li> </ul> <p>○ヒナをひったくるようにして私の帽子に入れたときの先生の気持ち</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バスを止めるわけにいかない。</li> <li>・止まってないでバスに乗ってほしい。</li> <li>・とりあえずヒナを帽子に入れて列を止めないようにしよう。</li> </ul> <p>○そのときの私の気持ち</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大好きな先生が陰しい顔をしていて悲しい。</li> <li>・ツバメのヒナを拾ってはいけなかったのかな。</li> </ul>	<p>○資料の内容を捉えやすいように場面で区切って、登場人物の心情を追っていく。</p> <p>○文章に書かれている心情も確認したうえで、さらに深く考察していくよう促す。</p> <p>○私以外の登場人物の気持ちを考えることで、生命の大切さだけがテーマでないことに気付かせる。</p> <p>○私の葛藤が始まることに気付かせる。(捨うべきだったのか、拾わな</p>	15

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒナを拾わなければ良かった。</li> </ul> <p>○バスが止まって男の先生が私に、「そのヒナはここに残していこう」と言ったときの私の気持ち</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・置いていったらヒナは死んでしまうけど、私のせいでバスが4台も止まっているから置いていくしかないのかな。</li> <li>・先生と戦うのは嫌だ。</li> <li>・せめて元のところに帰してあげたい。</li> </ul> <p>○ヒナを道路脇の草むらに置いていく決心をしたときの私の気持ち</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身を守ってしまったという後悔の気持ち。</li> <li>・集団行動をしているのだから、みんなに迷惑をかけてはいけないからしょうがない。</li> </ul> <p>●◎の部分の私の決断は正しかったのだろうか。(ワークシートに記入する)</p> <p>①正しい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなに迷惑をかけないためにしたのだから正しい。</li> <li>・もしかしたらヒナは助かったかもしれないから。</li> <li>・バスを止めることは、周りのみんなだけでなく、バスの運転手さんにも迷惑をかけてしまうから。</li> </ul>	<p>いべきだったのか)</p> <p>○バスを止めることで、周りのみんなに迷惑をかけてしまっていることに視点を当て、集団の中で生きていく上での協調性の大切さを理解させる。</p> <p>バスを止めると、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バス会社の人に迷惑をかけてしまう。</li> <li>・時間が遅くなるので、保護者の方に心配をかけてしまう。</li> <li>・放課後に予定がある友達ちに迷惑をかけてしまう。</li> </ul> <p>○二つの反する意見を並べることで、次の話し合いがスムーズに進むようにする。</p> <p>○正しいか正しくないかの二択に絞ることで、自分の考えをより深くまとめやすくする。</p>	<p>5</p> <p>8</p>
--	---	---	-------------------



## 7 板書計画

楽園のしっぽ

状況把握

・ 〆の時の気持ち

・ 〆の時の気持ち

○ヒナを置いていった私の決断

正しい

・ ・ ・

正しくない

・ ・ ・

小学校4年生の春のキャンプ。学年全員が、4台のバスに分乗して遠出をした帰り道のことだ。

バスの待つ駐車場まで列になって歩いて戻る途中、私は、とある家の前の溝に落ちているツバメのヒナを見つけて動けなくなってしまった。みんなが押し合いへし合いしてのぞき込む中、うずくまっているヒナを両手ですくいあげる。くちばしなんか文字通りまだ黄色くて、ちょっと押しでもつぶれてしまいそうだけど、前にスズメだって育てたことあるもの、きっと大丈夫。

と、滞る列を不審に思った先生が走り寄ってきた。

「そこ、何してるの！道草してないでまっすぐ歩きなさい！」

「先生、見て、ツバメの子が…。」

最後まで言う暇もなかった。先生は一瞬迷いこそしたものの、すぐにヒナをひったくるようにして私の帽子に入れると、列のほうへぐいっと背中を押しやったのだ。

交通量が多いところだったから先生もぴりぴりしていたのだろう、と今だからわかる。でも当時の私は、大好きな先生の険しい横顔と、押された力の思いがけない強さにすっかりすくんでしまい、バスが動き出してからも帽子の中のヒナを眺めるふりを装ってうつむいていることしかできなかった。

けれど、バスは5分ほど走った後するすると路肩に止まった。運転席のほうから無線ではほかのバスとやり取りする声が聞こえ、やがて男の先生が私の席へやって来て、ひどく優しい声で言った。「そのヒナはここに残していこう。生きた餌しか食べないから僕らにはとても育てられないけど、ここならお母さんツバメが見つけて餌を運んでくれるから。ね？」

まわりじゅうの視線が注がれていた。私のせいで4台ものバスが止まっているのだ。巣からこんなに離れた今、お母さんうんぬんという先生の言葉がその場を丸くおさめるためのウソに過ぎないことくらい子供心にもわかっていた。でも私には何も言えなかった。そんなのウソだよ、と言ってしまったが最後、ヒナを守るために先生たちと戦わなくてはならなくなる。ああ、こんなことなら拾ったりしなければよかった。せめてもとの場所に帰してやれたら…。

結局、しばらくして、バスは再び走り出した。パイパイ鳴くヒナを道路脇の草むらに残して。

先生たちばかりかクラスのみみんなまでがほっとしているのを肌で感じながら、私はやっぱりうつむいていた。